

巻頭言

特集 オリパラ サイコウ

KEIO SFC JOURNAL Vol.20 No.1 特別編集委員

牛山 潤一

慶應義塾大学環境情報学部准教授

“オリパラ サイコウ”…このオヤジギャグ感満載の学術誌らしからぬタイトルは、特別編集委員を拜命した直後に、雷に打たれたように脳内を駆け巡ったフレーズから成っている。一生に一度巡り合えるどうかもわからない日本開催のスポーツの祭典に対して、SFC がもつ多様な学術の光はどのような彩りを与え(=彩光)、スポーツの文化的・社会的価値を捉えなおし(=再考)、我が国の発展に寄与することができるのか(=再興) …そんなことを議論し尽くしたあとで、アスリートたちの問答無用の超絶パフォーマンスにただただ酔いしれる 2020 年の夏を過ごせたら、こんな素晴らしいことはない(=最高)。オリパラに含まれるさまざまな“サイコウ”をパッケージングした KEIO SFC JOURNAL を作りたい…こうした思いをこのタイトルにギュッと凝縮したつもりである。

ところが、今世界を覆うこの暗く重い雰囲気はどうであろうか。TOKYO2020 は 2021 年への延期が決定された。そのうえ、COVID-19 の世界的な感染拡大はとどまるところを知らず、この延期開催すらも保証するものはどこにもない。「一寸先は闇」とよくいうが、我々の前にはただただ暗く長いトンネルが続いている、そんな印象である。

そう、1 年前に本号を企画したときとは明らかに状況が違うのだ。これまでの KEIO SFC JOURNAL の歴史のなかでも、この難しさはなかなかのものであろう。招待論文の執筆者の皆様は、依頼を受理していただいたときと同じ気持ちで原稿に向き合えるのか？ そもそもこんな状況下で今オリパラを語ることに何の意味があるのか？ そんなネガティブな気持ちしか湧き上がらず、編集長の清水唯一朗先生、副編集長の秋山美紀先生に「この夏の発刊

をめざす形で本当にいいのか？」と問い合わせました。「オリパラ号の発刊は延期」そういう意志決定を心のどこかで待っていた気もする。

しかし、それに対する清水先生からの返信は(良い意味で)予想を裏切るものであった。「ワクワクして2021を待てるようなものになればうれしいです」…なるほど！私のなかで暗雲がパッと晴れた瞬間だった。現状を憂いて辛気臭くなるのなんて、あまりにも普通すぎる。いつでもパワフルに、いつでもアクティブに、Excitementを求めていく姿こそ“SFCらしさ”であり、創立から30年、色褪せることのないSFCの真骨頂なのではないか？

こうした心境の変化とともに、特別編集委員としてこの号にかけた思いは“Re-exciting Olympics & Paralympics”へと進化した。サイコウ=再興(奮)である。ただでは転ばない。ただやり直すだけでもない。せっかく一度倒れたのなら、それを力にバージョンアップすればいいのだ。本号には、こうした私の思いに呼応するかのごとく、現状を受け入れ、未来のオリパラに思いを馳せる研究者たちの活きた言葉が詰まっている。“オリパラ”というキーワード以外、それぞれの招待論文は着眼点も研究アプローチもまるで違う。その点もまた、相変わらずの“SFCらしさ”である。ただ、それだけではない。すべての論文の視点がひとつの未来に向かって収束していくような、そんな印象を抱くのはきっと私だけではないであろう。

そしてもうひとつ、本号ではこれまでにはない取り組みとして、SFCの教員と学外ゲストとの対談を3本企画した。普段は自分の専門について喋りたくて仕方のない教員勢にあえて聞き役をお願いし、ゲストの方々からオリパラに関わるさまざまな話題を引き出してもらった。どの対談も上限文字数の倍を超えるボリュームでありながら、安易にカットできる話題などどこにもない、非常に白熱したものとなった。苦渋の決断でカットした話題もたくさんあり、できることならノーカット版もどこかで公開したいくらいである。ぜひ対談が実施された時期と展開された話題とを照らし合わせて、当時の社会情勢を思い出しながら、それぞれのゲストの言葉に胸を躍らせていただきたい。

最後に、2020年4月に「慶應義塾大学湘南藤沢学会」は「慶應 SFC 学会」へと名称を変えた。つまり本号は、慶應 SFC 学会として最初に発刊する KEIO SFC JOURNAL である。これを契機に、本号の表紙は、公募を経て集

められたデザイン案のなかから選定されることとなった。総合政策学部1年丸山剛典君によるデザインの、象徴ともいべきこの突き上げられた拳には、現代社会を覆う閉塞感に立ち向かい、これを自らの力で突破していこうという、若々しさと荒々しさが満ち溢れている。辛いのはアスリートたちだけではない。当たり前のカンパスマイフを過ごせない学生たちもまた多種多様な重荷を背負っていることであろう。本号が、現代社会特有の窮屈さから学生たちを解放する、そんな一服の清涼剤になれば、こんなに嬉しいことはない。